詩人の目線。原発再稼働、そして国と世界の明るい未来を信じて。

土木大学　　正会員　○井上　達明

筆者は数え歳84歳、余生短い世の片隅の老爺も今や石川啄木の「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」の心境である。昨年９月の名古屋大学での大会では筆者は、土木の原点に立ち戻り土木安全哲学を構築すること、市民目線そして市民が主人であると述べ、電力の発・送電分離と持続可能エネルギーの開発と利用の発展を提案した。断層だらけの日本列島、原子力規制委員会が厳しく審査する程、再開許可困難。国は行くも退くも地獄の選択である。発電と送電の分離及び再生可能自然エネルギー発電の拡大に努めなければならぬ。今回は「詩人の目線」即ち「我々は何者か？」「我々は何処へ行くのか？」という視点から我々自身を見直し、科学の哲学及び技術の哲学を再構築する縁(ヨスガ：手掛かり)としたい。序 乍(ついでなが)ら「土木学会」の会員としての希望は、大会の部門分類の中で「土木史」の部門の上に「土木哲学」及び「土木倫理」の部門を設けて戴きたいことである。

以下、広く人口に膾炙する詩は、紙面に限りがあるので作者に失礼乍ら、筆者の思いでもある部分のみ取り上げて記させて戴くことにする。

○「道程」　　高村光太郎

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ
父よ　　以下略

○「二十億光年の孤独」　　谷川俊太郎

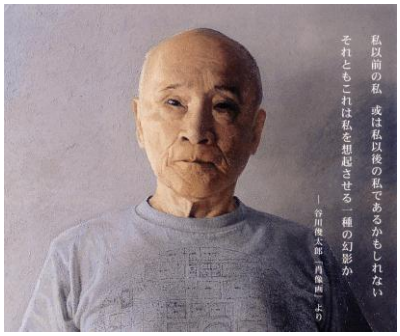
人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き
ときどき火星に仲間を欲しがったりする
　　中　略
宇宙はどんどん膨らんでゆく
それ故みんなは不安である
二十億光年の孤独に
僕は思わずくしゃみをした
(筆者註：谷川は1931年生まれ)

○「朝を愛す」　　室生犀星

僕は朝を愛す
日のひかり満ち亙る朝を愛す
朝は気持が張り詰め
感じが鋭どく
何物かを嗅ぎ出す新しさに飢えている。
朝ほど濁らない自分を見ることがない、
朝は生れ立ての自分を遠くに感じさせる。
朝は素直に物が感じられ
頭はハッキリと無限に広がっている。
木立を透く冬の透明さに似ている。
昂奮さえも静かさを持って迫って来るのだ。
朝の間によい仕事をたぐりよせ、
その仕事の精髄を掴み出す快適さを感じる。
自分は朝の机の前に坐り、
暫らく静かさを身に感じるため、
動かずじっとしている。
じっとしている間に朝のよい要素が自分を囲い、
自然のよい作用が精神発露となる迄、
自分は動かず
　　多くの玲瓏たるものに烈しく打たれている。

○「あどけない話」　　高村光太郎

智恵子は東京に空が無いという、
ほんとの空が見たいという。
　　中　略
阿多多羅山の山の上に
毎日出ている青い空が
智恵子のほんとの空だという。
あどけない空の話である。



左：谷川俊太郎 肖像画
野田弘志 作画「崇高なるもの」

キーワード　詩人の目線，我々は何者？，孤独，朝と精髄，東京の空，一般人によるボランティア政治
連絡先　〒555-0011 大阪府大阪市西淀川区竹島３丁目７番４号　　井上達明建築事務所　　ＴＥＬ06-6478-1028

○「前へ」　大木 実

少年の日読んだ「家なき子」の物語の結びは、
　こういう言葉で終っている。
――前へ。
　　中　略
僕はあの健気なルミが好きだ。
辛いこと、厭なこと、哀しいことに、出会うたび、
僕は弱い自分を励ます。
――前へ。

○「自分はいまこそ言おう」　山村暮鳥

なんであんなにいそぐのだろう
どこまでゆこうとするのだろう
どこで此の道がつきるのだろう
　　中　略
此の生の一本みちがどこかでつきたら
人間はそこでどうなるだろう
おお此の道はどこまでも
　人間とともにつきないのではないか
谿間をながれる泉のように
自分はいまこそ言おう
人生はのろさにあれ
のろのろと蝸牛(ででむし)のようであれ
そしてやすまず
一生に二どと通らぬみちなのだからつつしんで
自分は行こうと思うと

○「街」　与謝野晶子

遠い遠い処へ来て、
わたしは今へんな街を見て居る。
へんな街だ、兵隊が居ない、
戦争をしようにも隣の国がない。
大学教授が消防夫を兼ねて居る。
医者が薬価を取らず、
あべこべに、病気に応じて、
保養中の入費にと
国立銀行の小切手を呉れる。
悪事を探訪する新聞記者が居ない。
てんで悪事がないからなんだ。
大臣は居ても官省がない、
大臣は畑へ出て居る、
工場へ勤めて居る、
牧場に働いて居る、
小説を作って居る、絵を描いて居る。
中には掃除車の御者をしている者もある。
女は皆余計なおめかしをしない、
瀟洒とした清い美を保って、
おしゃべりをしない、
愚痴と生意気を云わない、
そして男と同じ職を執って居る。
特に裁判官は女の名誉職である。
勿論裁判所は民事も刑事もない、
専ら賞勲の公平を司って、
弁護士には臨時に批評家がなる。
併し長々と無用な弁を振いはしない、
大抵は黙って居る、
稀に口を出しても簡潔である。
それは裁決を受ける功労者の自白が率直だからだ、
同時に裁決する女が聡明だからだ。
また此街には高利貸がない、
寺がない、教会がない、
探偵がない、
十種以上の雑誌がない、
書生芝居がない、
そのくせ、内閣会議も、
結婚披露も、葬式も、
文学会も、絵の会も、
教育会も、国会も、
音楽会も、踊も、
勿論名優の芝居も、
幾つかある大国立劇場で催して居る。
全くへんな街だ、
わたしの自慢の東京と、
大ちがいの街だ。
遠い遠い処へ来て、
わたしは今へんな街を見て居る。

○「三百六十五歩のマーチ」　作詞：星野哲郎
　　前　略　作曲：米山正夫
あなたのつけた足あとにゃ　唄　：水前寺清子
きれいな花が咲くでしょう
　腕を振って　足をあげて
　ワン・ツー　ワン・ツー
　休まないで歩け

《引用文献》

１）「ポケット詩集Ⅱ」編者 田中和雄，(株)童和屋，2001年
２）「ポケット詩集Ⅲ」編者 田中和雄，(株)童和屋，2010年